文芸の力　時代の力

折口信夫

青空文庫

あゝ言ふ時代別けは、実はおもしろく思はぬのだが、一往は、世間に従うておいてよい。東山だの、桃山だの、と言ふ称へである。

この所謂東山時代・桃山時代、其に似た心持ちを、十分に持つた江戸の元禄時代、此等の時期が、日本の芸術・文学の、大いに興つた時代、と言ふことになつてゐる。此には、異存はない。歴史の上の、著しい事実だからである。だが、此時代が、健全な時代であつたか。此反省は真に、それ／〃＼の時代に、同じ(ドウ)難いものゝあることを感じさせる。而も其でゐて、芸術・文学を生育し、飛躍させるのに、まことに恰好な力のあつた時期だつたことは、否む訣にはいかぬ。時代として、俄分限・成り上り者の時世(トキヨ)、といふ感の深い此等の時勢に、健康な芸文の営みが行はれ、美しい花が咲くと思はぬのが、通例、芸術史・文学史の上の、考への型になつて来てゐる。吾々すら、さう思ふのだから、世間大体はまづ、さう言ふ行き方(イカタ)で、時勢と芸文との関聯を、考へてゐるに違ひないと謂はれよう。

芭蕉や、近松や、西鶴において、題材はどうあらうと、表現力や、芸文に対する意欲、第一に人間の掴み出し方の、実に堂々として居る点を見ると、不健全な時勢が育んだ文学であり、文学者である、とは思はれぬのである。かう言ふ点になると、扱つてゐる題材などは、全く問題ではなくなる。

金閣や銀閣の、立面図の案出せられた時代、さう言ふ建て物の内部を整へる壁代・調度の類を

作り出す異常な俊才も、輩出してゐたのである。其よりも更に、さう言ふ座敷に出て演ぜられた芸能や、其台本となる文学が、発達してゐたことは、誰しも認める事実であらう。又、さう言ふ芸能の代表者の背後には、幾千万のみじめらしい芸の乞士が、古い歴史を負うて、おなじく古き世より持ち伝へた芸能に、喚き、踊り、狂うて居たのであつた。利休を生み出し、又利休の生み出した「茶」の伝統が、果して後世の吾々の考へ慣れてゐるやうに、わびしい味ひに帰するものだらうか。一輪の「わびすけ」の半開の白瑪瑙の鍾は、憂鬱とは凡、縁のない快さに咲いてゐるではないか。

利休の生涯を考へても、此わびすけを拡大したら、そこに出て来さうな闊達性が、十二分に物を言つてゐる。彼の茶も、そこに、性根があつたやうである。

桂離宮などを拝見して帰つた印象の中心には、やはり此闊達性の、大きくひろがつて来てゐるのに、心づく。

なる程、遠州好みと言ふものは、こんな傾向に対する評価だつたのだ、と会得するであらう。石州の案出したと伝へる茶席・茶庭を見ても、やはり相当に、豪華過差の感を受ける。

茶の精神の中から、此豪華にして過差なるものを認めることの出来ぬ、人ばかりでもあるまいと思ふが、どうだらう。

茶は茶、日常生活は日常生活といふ風に游離してゐたのが、利休の生活ではない。又、さう言ふ游離に、意味を認めて、そこに風雅閑寂があるのだなどゝ考へる人があるとしたら、其は、

思ひ直して欲しいと思ふ。

茶は、芸術の生活内容を持つて居て、言語化・造形化せなんだまでのものなのである。そのかはり、演劇の最近い処まで、素質を展開して来て居たのではないかと思ふ。花道に並んで見物したり、羅漢台に押し合つて、役者の後姿とか、かうせきばかりを鑑賞して居た。あゝ言ふ見物が、茶の客に当るやうである。

謂はゞ、見物である筈の客と、少数の陪賓とが、時としては役者になり、立てば頭がつかへ、たひらに坐れば、壁土をおとすと言ふ様な、窮屈な舞台で演ぜられる演劇だ、と言ふことも出来よう。だが此は、決して比喩のつもりで言ふのではない。真実さうした、僅かな距離よりないことを言はうとするのだ。

江戸の初期から、段々用語を替へて、おなじ用語例に宛てはめようとした語がある。だてといふ語の代表する、一系の語である。寛闊と言ひ、だてと言ひ、互に一つ用語例の中に、少しづゝ範囲を異におし展げて行かうとした。其がもつと外面式に表現せられたものは、六方（ロッパウ）・丹前の類の語で、所作行動から、性格までも偲ばせるやうになつたのだ。

結局、語自身圧迫せられて、極めて狭い片隅にしか、意義を残さずなつた、その昔の「かぶき」なる語の内容を、色々に言ひ替へたに過ぎぬと言へば、言ひ過ぎだらうか。

新興の気象激しい時代には、迅速に生育する力がつきとほつて居る。憂への、歓びの芸術も、うつたへる、たのしさの文学も、此力に依つて、十分に伸しあがるのである。憂愁の文学が、

陰鬱な時代に出て来るとすれば、其は愚痴文学であり、口説（クゼチ）の文学に過ぎぬであらう。其と今一つ、もつと芸文を育てる原動力になるものは、擁護者である。擁護する者なしに、育つてこそ、真の芸文ではあつても、擁護するものゝない迫害の時勢には、芸文は萎れいぢけてしまふのである。「花」は花でも、温室の花を望む吾々ではない。擁護者の手で、さもしい芸文の幸福を、偸みたいとも思はぬ。

だが、さう言ふ擁護によつても、咲くべき花の、大いに咲いて来て居るのが、歴史上の現実であつた。成り上り時代・俄分限の時勢の、東山・桃山・元禄などの時代が、吾々に多くの遺産を残してくれたことは、疑はれぬ事実なのである。此が、文士・芸術家の理想を超越した世間の姿なのであつた。

青空文庫情報

底本：「折口信夫全集　21」中央公論社
　1996（平成8）年11月10日初版発行
底本の親本：「折口信夫全集　第十七巻」中央公論社
　1967（昭和42）年3月25日発行
初出：「国文学叢話」
　1944（昭和19）年11月刊行
※底本の題名の下に書かれている「昭和十九年十一月「国文学叢話」」はファイル末の「初出」欄に移しました。
入力：門田裕志
校正：植松健伍
2018年8月28日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（https://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

文芸の力　時代の力

折口信夫

2026年10月1日　第二版

奥　付

発行　　青空文庫

URL　　http://www.aozora.gr.jp/
E-Mail　　info@aozora.gr.jp

作成　　青空ヘルパー　　赤鬼@BFSU
URL　　https://aohelp.club/
BiliBili　　https://space.bilibili.com/10060483

Special Thanks
　青空文庫　威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー http://aohelp.club/
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
http://tokimi.sylphid.jp/